

# 10kℓ水槽によるヒラメふ化仔魚の飼育について\*

平本義春・三木教立・小林啓二

ヒラメの放流用種苗を量産する目的で、昭和55年度に10Kℓ水槽を用いてふ化仔魚の飼育試験を行った。更にこの試験結果を基に稚魚（平均全長15mm）10万尾を生産するために必要な各生物餌料の日間給餌量とその総給餌量、過去3カ年の10Kℓ水槽によるふ化仔魚飼育の歩留りと二・三の要因との関係等について検討し、次の結果を得た。

- 1) 自然産卵によって得た卵からのふ化仔魚を  $16.5 \sim 20.0 \times 10^3$  尾/Kℓの密度で上屋付10Kℓ水槽（ $2.0 \times 4.9 \times 1.3$  m、飼育水量10Kℓ）3面に収容し、シオミズツボワムシとアルテミア幼生を主餌料として35～36日間飼育した。
- 2) 稚魚の取り上げは、排水口にビニール管（直径50mm）を接続し、飼育水がほとんど無くなった時に落差を調整して、海水で稚魚を押し流しながら受け網で取り上げるとへい死尾数が少なく、作業効率が最も良かった。
- 3) 歩留りは57.03～82.78%（平均71.50%）の範囲であり、10Kℓ水槽3面を用いて393,225尾（平均全長15.1mm）の稚魚を得ることができた。なお、単位生産量は13,108尾/Kℓであった。
- 4) 稚魚10万尾を生産するために必要な生物餌料の日間給餌量は30.5～867.2g（平均444.1g）の範囲であり、その総給餌量は12.91～16.50kg（平均14.21kg）であった。また過去3カ年におけるふ化仔魚の飼育結果、稚魚10万尾を生産するために必要な生物餌料の総給餌量は、歩留り（24.30～82.78%）が低くなる程多く12.97～27.45kgであった。
- 5) 歩留りは、収容したふ化仔魚のふ化率（46.4～81.9%）が高い程、飼育期間中の総換水量（73.5～126.5Kℓ）が多い程、また総給餌量に占めるワムシの割合（26.24～86.24%）が低い程高くなり、ふ化仔魚の収容密度（ $12 \sim 20 \times 10^3$  尾/Kℓ）および飼育期間中の底掃除の回数（2～4回）との間には、はっきりした関係がみられなかった。

---

\*本研究の詳細は、栽培技研10（1）、（1981）に記載。